

序説：グローバル化の段階と 移民の言語管理

サウクエン・ファン

Introduction: Globalization Stages and Migrants' Language Management

Sau Kuen FAN

This special issue contains a collection of work conducted under two joint research projects financially aided by the Global Communication Institute at Kanda University of International Studies between 2013 and 2015. One entitled “Globalization stages and migrants’ language management: Ethnographic studies of evaluation diversity”, and another one entitled “The study of language management for language policy making in multi-language society”. There are eight papers in total, seven in Japanese and one in English. The first five papers are empirical studies on cases overseas (Fan, Ko & Kon) and in Japan (Kato, Takeuchi, Akbari). Authors of the last three papers (Muraoka, Ko, Kitamura) demonstrate their theoretical concerns for further study.

Fan, the principal researcher, discusses the case of Hong Kong migrants in Australia, through which she calls attention to the problem of language management among migrants whose native language is beyond the target of language planning and / or related language policies in a multicultural society. Ko & Kon conducted a survey in Jeju Island in Korea in order to find out the characteristics of language use and language awareness between two types of migrants: Jeju returnees from Japan, and foreigners from other countries. On the basis of a case study of two Chinese migrants in Japan, Kato studies their management and the change of language resources. The aim of Takeuchi’s paper is to find out how a group of international students attempted to solve problems they encountered when interacting with local Japanese outside their English speaking environment. Akbari’s paper focuses on the Persian speaking community in Japan, a community which has received little attention so far. She examines how Persian native speakers manage their distinctive ritualistic acts and linguistic acts in contact situations when

communicating with Japanese native speakers.

On the theoretical side, Muraoka raises attention to the close relationship between the approaches of linguistic ethnography and contact situation. As far as analysis of accustomed language management is concerned, as he suggests, contact situation studies can be further developed by integrating the ethnographic and diachronic points of view. Ko indicates the importance of diachronic and synchronic narratives in language biography investigation in order to further our understanding of immigrants' language acquisition problem. Kitamura's paper deals with linguistic politeness in Japanese, which is an important issue not only when Japanese is used within the Japanese society but also in the globalized world.

The report attached to the end of this special issue summarizes the main points raised in the "Language Management and Process Studies Workshop" held on 7th March, 2015. During the workshop, participants from eight universities in Japan joined the research project members to discuss the foundations of the language management theory (LMT), and the theoretical approach and methodology of LMT and conversational / interactional analysis.

キーワード: グローバリゼーション、言語管理、移民、評価、多様性、
エスノグラフィー

社会言語学、とりわけ言語管理研究がこれまで示してきたように、グローバルゼーションにおける移民の言語使用は、ハイブリッド性、複数言語性、非体系性など、一言で言えばその多様性によって特徴づけられる。こうした多様性は、superdiversity (Vertovec, 2007) とも呼ばれ、古典的な移民コミュニティが成立している場合に移民が行う言語に対する行動とは異なっている。古典的な移民コミュニティが成立している場合には、言語使用も安定化しており、たとえば単語の意味や機能の意図的な変更、新造語、言語選択と言語混交など、言語管理の最終段階にあらわれる言語的調整が観察でき、データ収集も可能である。一方、現代のグローバリゼーションにおいては、社会によって多様な発展段階があるだけでなく、通信手段や移動手段の発達にともなって移民コミュニティそのものが質的に変化しており、グローバル化していることを押さえておく必要がある。そのため、(1) グローバリゼーションが開始され、多言語主義を経験しはじめ

たばかりの段階にある社会においては、ホスト社会も移民も、言語をどのように使用するかいまだに試行錯誤しており、古典的なコミュニティをもつ移民において有効であった言語的調整の研究は必ずしも有効ではない、(2) グローバル化したコミュニティを背景にもつ移民の場合には、言語レパートリーの多様性、多言語性が顕著であり、接触場面で用いる言語規範もまた選択的、流動的である。とくに言語使用に対する評価はより意識的であり多様であると考えられる。

本特別号は、グローバル化したコミュニティを背景にもつ移民の言語問題と多言語社会の来るべき方向性をさぐるために行われた2つの共同研究プロジェクトの研究成果に基づいている。プロジェクトの詳細は以下の通りである。

- (1) 「グローバリゼーションの段階と移民の言語管理：評価の多様性に関する民族誌的研究」（研究代表者：サウクエン・ファン、研究期間：2013-2014年度、研究助成：神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所）
- (2) 「多言語社会の言語政策に向けた言語管理研究」（研究代表者：サウクエン・ファン、研究期間：2015年度、研究助成：神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所）

本特別号では、実践研究5本、理論研究3本、合計研究論文8本を収録した。実践研究のうち、ファン、高・今は日本国外のケースを扱い、加藤、竹内、アキバリは日本国内のケースを取り上げている。村岡、高、北村の3本の論文は、それぞれグローバル化社会における移民の言語問題を研究するための視点や方法論などについて考察する。主な論点をまとめると次のようになる。

- (1) ファン論文：多言語社会オーストラリアにおいて、言語計画及びそれに伴う言語政策の対象ではない広東語を母語とする香港系移民の言語管理の問題を考察し、移民に対する言語管理研究の広がりを示唆する。
- (2) 高・今論文：韓国の済州島に居住する人々のうち近年帰国した済州島出身の在日韓国人と、他の外国から移住した韓国語非母語話

者を比較しながら、彼らの言語使用と言語使用意識の問題を分析する。

- (3) 加藤論文: 二人の中国人移民のケース・スタディを通して、移民の言語リソースにおける管理とその変容を考察する。
- (4) 竹内論文: 日本にいながら英語公用語の環境で過ごす外国人住民に着目し、彼らが現実の日本社会に出るときにどのようなインターアクション問題があるかを分析する。
- (5) アキバリ論文: 独特の儀礼的言語行動を保有するベルシア語母語話者は、日本語母語話者との接触場面において言語行動をどのように管理しているのかを考察する。
- (6) 村岡論文: 言語学的エスノグラフィーと接触場面研究の親近性を指摘し、その成果の一部を参照しながら、移民の習慣化された言語管理の軌道を研究する際にどのように役に立つかを論じる。
- (7) 高論文: 言語バイオグラフィー調査で報告される移住者の共時的・通時的語りを言語管理の視点から分析し、異なる言語環境をもつ日本の外国人移住者の日本語使用や習得に対する意識、またその変化の方向性を明らかにする。
- (8) 北村論文: 日本語における言語的ポライトネスに焦点を当て、特にウチ・ソトの概念に根付いたスタイルシフトから、日本社会ひいてはグローバル社会の秩序による文化規範の構築に重要な基礎概念を整理し、今後の課題を指摘する。

巻末に掲載されたのは、2015年3月7日に研究プロジェクトの一環として行われた「言語管理とプロセス研究」のワークショップ報告である。ワークショップでは、共同研究者は、8つの日本の大学から来場した一般参加者といっしょに「言語管理理論の基礎をさぐる」と「言語管理研究とプロセス研究」の課題を検討し、議論を行った。

参考文献

Vertovec, S. (2007) *New Complexities of Cohesion in Britain: Super-diversity, Transnationalism and Civil-integration*. London: Commission on Integration and Cohesion.